新・付着生物研究法の出版について

日本付着生物学会は2016年で現在の学会の前身である付着生物研究会発足から44年目、日本付着生物学会設立から20年目を迎えました。学会ではこれまで「付着生物研究法—種類査定・調査法—」(1986年)、「黒装束の侵入者—外来付着性二枚貝の最新学—」(2001年)、「フジツボ類の最新学—知られざる固着性甲殻類と人とのかわり—」(2006年)を刊行してきました。いずれも一般にはあまり馴染みの少ない「付着生物」についての知見を集めたもので、研究者、技術者、学生にとっては貴重な情報が盛り込まれた書物として活用されてきました。このうち、「付着生物研究法—種類査定・調査法—」は他物に付着して生活する生物達の分類や調査法について特集したユニークな書物であり、日本付着生物学会ならではの刊行物として活用されてきました。出版から30年を経過した今日、人々の関心は多種多様な動植物にひろがり、生物多様性の重要性を多くの人々が認識するようになりました。「はじめに」でも語られているように、「付着生物」が私達の生活に実は大きな影響を与えていることもここ最近一層明らかになってきています。加えて、「付着生物」の生活は付着生活だけではなく、浮遊生活の時期もあり、この幼生や胞子の生態や付着のメカニズムの解明も大いに期待されているところです。これらを解明するには、扱う生物が何という種であるかが決まらないと研究そのものが始まりません。過去の形態形質に依存していた分類の時代から、現在は遺伝情報を加味した系統分類の時代に入っています。それに伴い、今まで同じ形質を共有することから近縁種と見なされていた種が、遺伝子比較により実は近縁でないことが分かった種も少なからず見つかってきています。そのような現状に鑑み、日本付着生物学会では、2014年に旧「付着

生物研究法」の改訂が話題に上り、2015年の事業計画として秋にシンポジウム「動くのをやめた海の生き物たち—海洋付着生物の分類と生態—」を開催することになりました。このシンポジウムでは前書の「付着生物研究法」では扱えなかった他の付着生物群にも範囲を拡げて、それぞれの生物群の専門家の方々に最新の分類事情や生態を紹介して頂きました。その後直ぐに、この成果をとりまとめるべく、講演された専門家には、系統分類と種の査定に絞った「新・付着生物研究法」への掲載を念頭に執筆を依頼し、これまで編集作業を続けてきました。執筆者の方々のご尽力により、本書では、前身の「付着生物研究法」で扱った6動物群を大幅に上回り、藻類を加えた10の生物群を収録することができ、主要な「付着生物」の大部分を本書に網羅することができました。この中には、厳密には「付着生物」ではないものの、流木などに穿孔するため汚損生物として重要な二枚貝類の仲間であるフナクイムシ類も加えることにしました。前書にはなかった写真も数多く加えていただくことで、より的確な分類作業が可能になるよう執筆者の方々には尽力頂きました。さらに、最新の分類体系を反映させた上で、生物分類に際して種同定を進めやすい検索表をそれぞれのスタイルで作成いただいたのも特徴です。

この本の出版が、付着生物と日常接している研究者や学生だけでなく、これら生物による汚損に頭を悩ませている方々に対して、最新の分類体系の提供と付着生物の理解につながるとともに、付着生物のまだ明らかにされていない幼生および成体の生態解明につながることを大いに期待します。

(加戸 隆介)